

# 鬼瓦のルーツを尋ねて 韓国へ ②0

## 光州・無等山の古刹元暁寺へ

前橋市 富山 弘毅

光州 1 日目の続き。時計は正午を回っていましたが、金銀宗（キムウンジョン）運転手は「もっと大きなお寺に行きましょう。元暁寺がいいですよ」。

「では、お願いします」。車を飛ばして 30 分、無等山（ムドンサン）の反対側にある元暁寺（ウォンヒュサ）から眺める山々の眺望は、まさに絶景でした。ハイカーたちの自家用車が寺の前の道路にギッシリ駐車してありました。



光州 元暁寺 薬師殿  
風鐸の魚が大きい



元暁寺 大雄殿  
龍と鳳凰 交互



光州 元暁寺 晦巖楼前 ハイカーたちの車

境内には日本とそっくりの仏像が並んでいました。



光州 元暁寺 境内の仏像

薬師殿の軒下に行く風鐸の魚は他より大きく思われました。大雄殿正面の彫刻は龍と鳳凰が交互に並んでいました。

大雄殿と冥府殿の屋根には鬼が載っていました。

光州の町に帰ると、1 時 40 分でした。

金運転手の家業がうなぎ屋だったというので「うなぎ料理の

店はあるのですか」と聞くと「ありますよ」。「お昼はうなぎでもいいですよ」と提案しましたが、金さんは「光州名物は鴨なべですから」と、鴨料理の店ばかり並ぶ通称「鴨通り」の店へ連れて行ってくれました。

鴨鍋は、鴨 1 羽を 10 数個にぶった切り、こってりのスープで煮たもので、器に取り、すりゴマのようなものを入れて、フーフーいいながら食べます。2人でW27,000、おいしかったです＝マシッソヨ。



元暁寺 晦巖楼 丸瓦 鳳凰



光州 金運転手と鴨なべ

昼食後は、と言ってもすでに 2 時半。秋の陽はつるべ落としです。

珍しく街中にある寺、無覚寺へ。

鬼はいませんでした。講設堂の隅瓦にハングル文字で「ユソン」と刻まれています。仏教用語の「有性(ユソン)」(性=万有の本質)でしょうか。



光州 無覚寺 講設堂 隅瓦  
ハングル文字でユソン

疲れたし、光も弱くなったので「きょうはここまで」と、国立光州博物館前で降りてもらいました。

## 国立光州博物館も無料

韓国には国立博物館が 12 あるそうですが、私はこれまで中央(ソウル)、慶州、公州、扶余の各博物館を訪れたので、国立では 5 つ目です。広い前庭の向こうに大理石の堂々とした建物が建っていました。



国立光州博物館 正面

入口の窓口で「オルマエヨ?(おいくらですか)」と聞くと「イルボン?(日本人ですか)」というので「ネェ、イルボン」と答えると「無料です」とチケットをくれました。

どうして? 65 歳以上だから? いや、誰でも無料らしい。すばらしい! ソウルの中央博でも、釜山市立博でも、慶州

博でも無料でした。韓国の文化政策の水準を表しているのではないのでしょうか。

展示室には中年の男性職員がいて、幸い日本語の出来る方も見つかったので、鬼瓦は展示されていなかったのですが、展示してある軒先瓦について質問してみました。

「瓦当」という漢字に「アンマクセ(Roof and Tile)」と「スマクセ(Roof and Tile)」と、ハングル表現は違うが漢字と英語の表現は同じの説明札があったからです。

何回かのやり取りがあってやっと、前者は「平瓦」、後者は「丸瓦」だということがわかって納得しました。でも「望瓦・マンワ(Roof and Tile)」とどこが違うのかは、最後までわからず、あきらめました。

「望・マン」には「見張る。相手の動静を探る」という意味があるようですから「見張り役の瓦」でしょうか。でも「鬼瓦」ではないのです。



国立光州博物館  
アンマクセ(平瓦)



国立光州博物館  
スマクセ(丸瓦)



国立光州博物館  
マンワ(望瓦)

## 最終日、曹溪山の東へ遠征

翌日は、鬼探しの最終日。

光州から遠出して、東方の順天市に近い曹溪山の東にある仙巖寺と西にある松廣寺という、歴史的にも由緒ある古寺へ案内してもらいました。私のリストには光州市内の 3 寺ほどが残っていたのですが、金運転手は「みんな小さな寺。それより有名で

大きな寺がいい。高速道があるから、夕方までに3か所回れる」というのです。

仙巖寺と松廣寺は、事前の学習で「ぜひとも行きたいが、遠くて、行けるはずがない」と、資料は持ちながらあきらめていたところでしたから、幸運でした。

## にぎやかな仙巖寺

仙巖寺（仙岩寺＝ソナムサ）は、前日の証心寺や薬師寺と同様、ハイカーたちでにぎやかでした。



光州 仙巖寺の境内 ハイキングの人々

寺内も参詣者でいっぱい。寄進のちょうちんがぎっしりつるされて華やかさを演出しています。釈迦牟尼の誕生日の4月6日に信者が家族の名を書いて掲げる慣わしで、提灯1つ1万ウオン以上。金さんは「今年、10万ウオン以上、提灯にかけた」といいます。提灯の寄進は信仰の証しであり、何百何千の提灯はその寺の勢いや力を示すことにもなるのでしょうか。



光州 仙巖寺 境内 提灯

仙巖寺には一柱門、梵鐘楼に鬼がいましたが、梵鐘閣の隅瓦は単純だが変わった顔立ちでした。



仙巖寺 梵鐘閣 隅瓦 鬼

応真堂の隅瓦は蓮の花と実をデザインした、初めて見るすばらしいものでした。



仙巖寺 応真堂 隅瓦 蓮の花と実



仙巖寺 地蔵殿 隅瓦 鬼目に文字



仙巖寺 八相殿 棟端瓦 鳳凰

一柱門も提灯で彩られていました。私が柱の上の鳥の彫刻を指して「鶏だという人がいますが」と金運転手に話しかけたところ、通りかかった女性（ソウルの国立博物館の研究者だという）が「あれは鳳凰です」と教えてくれたのでした。



光州 仙巖寺 一柱門 全景

仙巖寺を出る途中に、高僧の墓地がありました。たくさんの墓(石柱)が並び中に、前々回掲載した「鬼か龍か」のデザインの墓石があったのですが、それと並んで「これはどう見ても蛇だろう」というデザインもありました。しかし、金運転手は「やっぱり龍でしょう」といいます。



仙巖寺  
高僧の墓地



仙巖寺  
高僧の墓碑  
龍か蛇か

## 念願の松廣寺を参詣

念願だった松廣寺(ソングアンサ)の参詣でも、金さんは「日本の写真家がお寺を撮りに来ているので」とことわり、入場料2人で6,000ウオンを払って遮断機を開けてもらい、登山者集団の間を縫って車を走らせてくれました。おかげで、効率的に撮影できました。

決して頼んだわけではないのですが、白髪の老人の私が坂道を2キロも3キロも歩くのは無理だと、気をきかせてくれたのでしょうか。そうでなければ、途中で「もう歩けません」と、ダウンしていたに違いありません。感謝です。

松廣寺には「無無門」と掲額された大きな門があり、その屋根には龍を刻んだ隅瓦によりオブジェのようなものが載せられて、なかなかみごとでした。どんな意味が

込められているのか、わかりませんが、厳肅さの中に「遊び心」を感じました。



光州  
松廣寺  
無無門



松廣寺 無無門 大棟 瓦のオブジェ 龍

鬼瓦はありませんでしたが、隅瓦には、変わったデザインがいろいろありました。



松廣寺 大雄宝殿  
鬼目の中に花



松廣寺 僧宝殿  
文字

松廣寺で私が写真を撮っている間に、金さんは龍の絵のケータイ用ストラップを買って、記念にとプレゼントしてくれました。多分4,000~5,000ウオンはしたでしょう。心遣いに、いたく感激しました。(つづく)



松廣寺 地藏殿 鬼目に文字